130 地方史・地域史とは何か

「くに」より「たみ」の姿追究

県内の先人 偉大な日曜学者も

地方史研究協議会の大会が20、21の両日、横浜市中区の横浜市開港記念会館で開かれる。全国から研究者が集い成果を発表し交流する場で69回目となる。

「地方史」とは何なのだろう。耳慣れない人も多いだろう。歴史の取材を始めた当初、私もそうだった。

◇◇

地方史運動のリーダーだった芳賀登さん（1926～2012）が「地方史の思想」という著作を残している。そこには、中央にすえるのは「くにのあゆみ」ではなく「たみのくらし」だと記されている。

筑波大学の副学長などをつとめた芳賀さんは明治維新期の民衆思想などの研究で知られた。愛知県奥三河地方の豪農の家に残る江戸時代の記録を読み続けていると知り、同行させてもらったことがあった。数十年に及ぶ研究で見えてきたのは、100年先までを見すえた村落全体や山林経営の長期展望だった。

山の向こうは島崎藤村の「夜明け前」の舞台で、当主は熱心に国学を学んでいた。日本の近代とはそうした自力更生、独立自尊の日常の中から生まれたのだろうとの思いがした。

「郷土史」は都へ出て偉くなった地元出身者といった点に目が向きがちだ。それに対して〈地域の民衆のが「地方史」という概念だった。研究協議会の発足は1950年。神話で始まっていた歴史が戦争をもたらした。足元から書き換えなくてはとの思いが背景にはあった。

◇◇

地域の歴史に挑んだ先人は県内にも多い。その中から赤星直忠さんの生涯をたどってみよう。横須賀市長坂にある「赤星直忠博士文化財資料館」で資料を見せてもらった。

1902（明治35）年に横須賀で生まれ、旧制横須賀中学を出て小学校の代用教員となった。兵役を経て師範学校で学び、小学校や師範学校の教壇に立った。

考古学に関心を持ったのは中学生の時。学校の敷地内で古い時代の寺院の遺物が確認されたのがきっかけだった。三浦半島を中心に歴史の現場を訪ね歩くようになり、土器や瓦などを採取した。大正時代のことで周囲に分かる人がいなかったので、東京の帝室博物館（現・東京国立博物館）に通い教えを受けた。

資料館研究員の斎藤彦司さん(79)と剱持輝久さん(69)が、赤星さんの研究業績を要約してくれた。

の海食洞窟の研究▽縄文時代の編年研究▽中世鎌倉のやぐらの研究▽三浦半島の城郭史……。

三浦半島の考古学研究の基礎を築いた人生だった。独学でゼロから始めた研究だった。古代の瓦が見つかると、それがいつの時期の何の瓦だったのかを知るにも、参考とする手がかりが地元にはなかった。そこで奈良に通い遺跡をめぐり瓦を探し、それと比較することで謎に迫った。

その成果で、最も早い段階の寺院の存在が確認された。相模の国で最古級で、三浦半島の古代史に新たな光をもたらした。

驚くのは城郭史の研究。中世、近世にとどまらず、20世紀の三浦半島に多かった要塞や砲台にまで及んでいる。戦前は軍事機密として足を踏み入れることができなかった。敗戦によって軍人が不在となった空白の時期に、赤星さんは訪ね歩き調査しスケッチを残した。何という探究心だ。

鎌倉、江戸、東京という都への入り口に当たる三浦半島が時代を超えて持っていた軍事的な意味合いが浮かんでくる。地域に生きる研究者でなくては到達できない視点だろう。

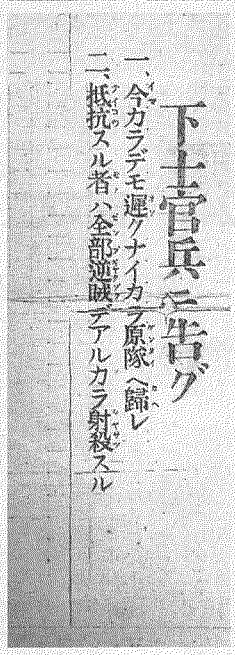
本業を別に持つ〈日曜考は生涯に500本近い論文を発表。61年には博士号を得た。91年に死去したが、その業績を伝えようと資料館は翌92年に開館。経営者が赤星さんから考古学の教えを受けた宇内建設が本社ビル内に場所を提供した。

赤星さんは横須賀考古学会を立ち上げ、数多くの研究者を育てた。研究員の斎藤さんは高校生の時に、剱持さんは小学生の時に、発掘現場の見学に出かけ、赤星さんの説明を聞いて考古学に関心を持った。「赤星先生との出会いで人生が決まってしまいました。地域の歴史の大切さを次の世代に伝えなくては」と2人は口をそろえた。

地方史研究協議会の大会は申し込みなしで誰でも参加できる。資料代1200円。20日は午前10時から研究発表があり、午後2時から五味文彦東京大名誉教授と久保田昌希駒沢大教授の講演がある。21日は午前9時15分から「拠点にみる相武の地域史」を論題に、中世の鎌倉、戦国の小田原、幕末の三浦半島、横浜の港湾計画などについての研究発表がある。地域の歴史とは何なのか。学ぶことの意味とは。そんなことを考える機会ともなるだろう。

（渡辺延志）

赤星さんの収集品を資料館では展示しているが、「多くは県や市の博物館に寄贈したので、これはごく一部です」と研究員の斎藤さん（左）、剱持さん（右）が説明してくれた＝横須賀市長坂



一、今カラデモ遅クナイカラ原隊ヘ帰レ
二、抵抗スル者ハ全部逆賊デアルカラ射殺スル
下士官兵ニ告グ

上「在野の考古学者」として三浦半島の歴史を掘り起こした赤星直忠さん＝赤星直忠博士文化財資料館提供 下「こんな物もあるんですよ」と資料館で見せてもらった2・26事件のビラ。赤星さんが東京に出かけ拾ったという。何でも記録し、大切に保管することを心がけていたという